Museum News

絵：柳田 基

2023 展覧会

企画展
生誕120周年　田中忠雄展
ー聖書を描くー
2023.5.15㊊▸7.15㊏

※詳細は4ページをご覧ください。

平常展
原田の森から上ケ原へ
ー学校のお引越しー
2023.7.31㊊▸9.30㊏

関西学院は1889年に神戸の東郊、原田の森（現在の神戸市灘区）に創立しました。なぜ学院は現在の上ケ原キャンパスに移転したのでしょうか。その背景には、大学昇格への資金問題が大きくかかわっていたのです。

2023年は、校地移転と大学昇格を院長として導いたC. J. L. ベーツの没後60周年にあたります。本展覧会では、移転にまつわるエピソードとともにベーツについてもご紹介します。

日本のキリスト教美術と「文化内開花」 ― 田中忠雄展に寄せて

キリスト教の「文化内開花」

インカルチュレーション（inculturation）というキリスト教の神学用語がある。もとは文化人類学の分野で用いられるエンカルチュレーション（enculturation）という概念、すなわち人の生育過程における文化や慣習――例えば日本人にとってのお辞儀など――の習得を意味する語を、20世紀後半にキリスト教の側が神学の議論に採用して作り変えたのである。

キリスト教の神学用語であるインカルチュレーションが意味するのは、狭義では、キリスト教の福音（よき知らせ、使信）と「文化との接触に伴い、相互作用がもたらす福音の受容と文化の変容」（J・スィンゲドー）を指す。ここで日本のキリスト教宣教を考えるのであるが、キリスト教が特定の異なる文化圏に伝播する時、キリスト教と文化との接点において様々な作用が生ずる。一つは、キリスト教の使信が与える文化への創造的な働きであり、顕著なものとしては賀川豊彦による組合運動やキリスト教による教育や福祉の展開を考えることもできよう。もう一つは、キリスト教の使信が、以下で取り上げるように、その文化に固有の形式や要素によって表わされるという文化適用の側面である（菅原裕二「インカルチュレーション」『岩波キリスト教辞典』2002）。

異なる文化との接点におけるこの双方の作用を含んで、インカルチュレーションは「文化内開花」「文化内受肉」とも訳出される。多様な文化との影響関係の中でキリスト教の本質的な部分が失われないかという危惧は存在するものの、積極的な意味では、この言葉は、キリスト教が蒔かれた地域の文化との密接な関係の中で、いかに独自に根付き、花開くことができるかを問う言葉であると言うことが可能である。

日本のキリスト教美術

思想、儀礼、制度、倫理や慣習などに至るまでインカルチュレーションの展開には実に幅広いものがあるが、特定の文化に固有の感性や手法を通した日本のキリスト教の表現という意味では、芸術についても興味深いものが認められる。例えば筆者の興味も含んで言えば、文楽や落語といった日本の伝統的な芸能を用いてキリスト教の物語が今日演じられている。砥部焼きの器を用いた典礼の執行は、その固有の美しさと共に深い味わいを残してくれる。加えて看過し得ないのは日本のキリスト教美術の展開である。

これこそ紋切り型の物言いかもしれないが、「キリスト教美術」と言う時にヨーロッパの文芸復興期の壮麗な作品をまず想定するとすれば、そのような眼差しは日本のキリスト者によるキリスト教美術をその亜流、あるいは傍流と見なすことになるのだろうか。しかし、私見では、筆者の理解する範囲に限ってではあるが、日本のキリスト教美術は文化内の、あるいは文化間の宗教的な使信の伝達に関する豊かな可能性を示すものであり、「キリスト教美術」のイメージと圧迫を超えて、その感性や技術の面も含めて自らの立ち位置や背景の意義を矮小化することなくこれを受け止めてこそキリスト教の物語や使信を表現しようとする点では一つの本流とも見られ得るのではないだろうか。少なくとも、確かにインカルチュレーションの前線の一つであると思われる。付言すれば、関西学院がその作品を所蔵する日本のキリスト教美術家としては、小磯良平（1903-1988）、堀江優（1933-2013）、鴨居玲（1928-1985）、渡辺禎雄（1913-1996）、渡辺総一（1949-）、そして、この５月から関西学院大学博物館が展覧会のテーマとして取り上げる田中忠雄（1903-1995）が挙げられる。

「生誕120周年 田中忠雄展 ― 聖書を描く―」に寄せて

ドイツ・ハイデルベルク大学の神学教授であり、美術を通じたインカルチュレーションに大きな関心を寄せたテオ・ズンダーマイアー（Theo Sundermeier, 1935-）は、アジアやアフリカのキリスト教美術に注目し、ドイツ語圏に紹介を進めた人物である。彼は日本のキリスト教美術家とその作品を取り上げて、「興味深い変化と土着の神学を暗示的に表現している」と述べ、「日本的な表現主義〔一般には対象の客観的表現を排して個人の自我、魂の主観的表現を主張する〕の発生は、その日本の美術が、いかに自立的な道を進む備えがあるかを示している」と評価した。これは田中に触れて語られた言葉ではないし、多様な背景を持った美術家と作品を一様に扱うことはできないとしても、田中が、文化間での表現をめぐる模索に留まらず、戦中の画家としての自らの深い反省の中で戦後に画家としていかに作品を描くべきかを自ら問い、自身のキリスト教信仰を背景に、時代状況との深い結び付きにおいて聖書をテーマに制作を進めたことを覚え、実際にその作品を前にする時、先の言葉は彼にも妥当すると思えてくる。事実、田中自身「絵描きは自己の作品で語る」ことを信念とした（竹中正夫「プロテスタントのキリスト教美術」『講座 日本のキリスト教芸術２』2006）。その思いの内実をも、ぜひ今回の「田中展」で味わってみていただきたい。

（大学博物館 副館長 橋本祐樹）

展覧会報告 I

企画展

美術と文芸シリーズ
新収蔵品

洋画家

大森啓助コレクション展

創立から戦前期までの関西学院で青春時代をすごした作家たちを紹介する企画展「美術と文芸シリーズ」の第 2 弾。2019 年度に寄贈された洋画家・大森啓助の作品群から油彩画 25 点とスケッチ等 19 点を初公開しました。

2022.10.17㊊ ▶12.17㊏
9:30〜16:30
※休館：日曜日、祝日（ただし11月3日㊍、11月13日㊐は開館）
開館日数　　54日
入館者数　1737人

シリーズ第2弾

同窓の洋画家

神戸で廻漕業を営む裕福な家に生まれた大森啓助（1898-1987）は商家の跡取りとして学ぶべく、1916年に関西学院高等学部商科に入学しました。ところが学院在学中に参加した絵画部・弦月画会（現・弦月会）で洋画の世界に魅了され、進路が変わります。卒業後は師事した金山平三（1883-1964）のすすめで28歳（1926年）のときパリに留学し、そこで画家として開花しました。

1932年の帰国後は、国画会会員になり制作を続けたほか、画家としての知識と語学力を活かして美術書の翻訳や画人伝を精力的に執筆しました。

関西学院は美術・芸術などの創作についての専門課程を持ちませんが、卒業生のなかには在学中に芸術や文芸を志し、その道で活躍した人たちがいます。大森は関西学院出身の画家たちのなかで最初期の人物です。そこで大学博物館は「美術と文芸シリーズ」という企画展の第2弾として、大森の作品をご紹介することにしました。

作品の寄贈者

房子夫人ご来館

本展でご紹介した作品は、2019年度に大学博物館に寄贈された大森の油彩画やスケッチ等です。このスケッチの多くは、大森が雑誌に寄せた暮らしやフランスでの日々にまつわる随筆等の挿絵のアイディアとして描かれたものです。大森が生前に自らスクラップした資料から該当記事を見つけることができました。彼のまめな記録作業に感謝しながら、会場ではスケッチの横に記事のパネルを添えて展示しました。

2019年度に作品群を寄贈してくださったのは、房子夫人（1929- ）です。本展開催にあたり、夫人には大森の人柄や絵画に対する姿勢、交友関係、日常の様子を教えていただきました（前号参照）。そして、会期中の11月15日（火）、房子夫人がご来館されました。作品の前で大森についてうかがうことができ、とても嬉しい時間となりました。

本展でご紹介することができた作品は寄贈いただいたものの一部です。これからも調査研究を続け、展示の機会を設けたいと思います。

会場をご覧になる房子夫人
当日はとても天気の良い日でした。初めて上ケ原キャンパスを訪れられた夫人に、スパニッシュ・ミッション・スタイルの校舎もご紹介することができました。

学芸員による展示案内

ギャラリートーク

会期中の11月2日（水）と11月18日（金）には、大森の画業をたどる形で作品をご紹介するギャラリートークを開催しました。スペースの関係上、会場では展示できなかったさまざまな大森の写真（図録所収）を「フリップ芸」のようにお見せしながらご案内したところ、参加者の方々に喜んでいただけました。

本展の展覧会ポスターに使用した《アッコルデオニスト》（1957年か、上図）は、パイプを咥えたアコーディオニストが画面いっぱいに描かれた作品です。ギャラリートークでは作品の構図を手がかりに、このアコーディオニストが演奏している音楽について想像するコーナーも設けました。大森の卒業校で、彼の作品を多くの方々と鑑賞する時間を持つことができました。

ギャラリートークの様子

広報室のインスタグラムに
本展の展示作業風景が載っています！

展示会場では作品を守るために、さまざまな工夫をしています。そのひとつが照明の照度です。光は会場で作品をご紹介するために必要ですが、作品を劣化させる要因でもあります。博物館のスタッフが照明の明るさを調整する様子をぜひご覧ください。
アカウント：kwanseigakuinuniversity
投稿日：2022年10月14日

展覧会報告 II

平常展

関西学院と原田の森

ー学院の誕生と発展：1889-1929ー

学院創立の地・神戸の東郊、原田の森（現在の神戸市灘区）にキャンパスが置かれた約 40 年の歴史をご紹介しました。

2023.2.20㊊ ▶ 4.22㊏
9:30 ～ 16:30
※日曜日、祝日（但し3月26日㊐は開館）
開館日数　　53日

原田の森キャンパス（1917 年）

大学博物館は年に数回、学院の歴史をご紹介する「平常展」という展覧会を開催しています。博物館を訪れてくださる皆さまとともに本学が歩んできた道のりを振り返り、未来を築く礎としたいと考えています。

学院創立の地

原田の森時代

アメリカ・南メソヂスト監督教会は、伝道者の養成と青少年へのキリスト教主義教育を目的として、1889年、原田の森に関西学院を創立しました。創立者はアメリカ人宣教師のW. R. ランバス（1854-1921）ですが、当時は外国人が居留地以外で事業主体となることが許されていませんでした。そこでランバスと親交があった中村平三郎（1864-1929）という日本人が、実質的に外国人経営だった関西学院の院主として対外的な代表者や設立者を務めたのです。会場では、中村の名義で提出された学院の設立に関する書類等をご覧いただきました。

創立時の学院には普通学部と神学部が設けられましたが、そのルーツは異なっていました。普通学部は1886年にアメリカ・南メソヂスト監督教会が設けた読書館（後のパルモア学院）にさかのぼります。一方、神学部は東京のフィランデル・スミス・メソヂスト一致神学校（日本メソヂスト連合神学校）からアメリカ人宣教師J. C. C. ニュートン（1848-1931）が神学生を連れて合流したことがはじまりでした。こうした学院のルーツをパルモア学院の宣伝カードやニュートンのサインがある神学校の卒業証書からご紹介しました。

そして1910年にはカナダ・メソヂスト教会が学院の経営に参画し、小さな私塾に過ぎなかった関西学院は大きく発展していきます。資金面と教師陣が強化され、新たな学部開設や新校舎の建設が可能になりました。ここでは、1912年に完成した念願の神学部専用校舎「神学館」定礎式の様子や、当時の学生の姿がうかがえる資料を展示しました。また、原田の森にキャンパスがあった様子を阪神急行電鉄の路線図等からご紹介しました。

会場では「新収蔵品」というコーナーを設け、学院史編纂室に2022年10月に寄贈されたC. J. L. ベーツ（1877-1963）の杖を初公開しました。出品リストは当館webサイトの展覧会ページからダウンロードしていただけます。

歴史を感じながら

2つの撮影スポット

本展の会期が卒業式と入学式と重なることから、学院の歴史を楽しみながら知ってもらえる撮影スポットを作ろうと考えました。ひとつは、関学生が日々目にしている学校名や三日月の形をした校章といった学院をあらわすものを使った撮影スポットです。なぜ「関西（かんせい）学院」と読むのか、校章やモットー "Mastery for Service"、エンブレムの意味について解説するパネルを見てもらった後に、それらを大きくプリントしたパネルを持って記念撮影ができるというものです。

撮影スポットの背景には原田の森キャンパスにあった中央講堂の大きな写真を設置しました。上ケ原キャンパスの校舎とは異なる煉瓦造りが印象的です。1,600席を有するこの講堂は、礼拝やさまざまな学院行事のほかに、神戸市民の文化的な行事の拠点としても利用されました。また、院長室や礼拝主事室、食堂等も設けられていたため「中央講堂」という名前のとおり、学院の中心的な建物でした。上ケ原キャンパスの講堂には学院の中枢機能はありませんが、「中央講堂」の名が引き継がれています。

◀撮影スポットの様子
「関西学院」や校章、エンブレム、モットーのパネルを持って撮影ができる。背景は原田の森キャンパスの中央講堂。

もうひとつは、時計台に博物館があることを知ってもらうための撮影スポットです。関西学院を象徴する建物である時計台の「時計」の部分から顔を出して記念撮影ができる顔出しパネルを作りました。展覧会活動にプラスして、みなさまに足を運んでいただけるきっかけになればと思っています。顔出しパネルは今のところ常設を考えています。来館記念に楽しんでいただけましたら幸いです。

◀顔出しパネルの様子
来館者に「face（時計の文字盤）に face（顔）をはめるというジョークになりますね！」と教えていただきました。

次回の企画展

生誕120周年

TANAKA Tadao

田中忠雄展

―聖書を描く―

2023年5月15日㊊～7月15日㊏
※休館：日曜日

洋画家・田中忠雄(1903-1995)は聖書を主題にした油彩画や礼拝堂のステンドグラスなどを手がけ、日本におけるキリスト教美術の進展に寄与しました。本展覧会では生誕120周年を記念し、関西学院所蔵の田中作品を一堂に集めご紹介します。

札幌に生まれた田中は、牧師の父が神戸女子神学校(後の聖和大学、現・関西学院大学)の教頭として赴任したことにより、11歳（1914年）のときに神戸に移ります。1916年には平野尋常小学校(現・神戸祇園小学校)から兵庫県立第二神戸中学校（現・兵庫高等学校）へ進学します。学友には小学校時代からの友人で後に洋画家となる岸上(小磯)良平(1903-1988)や、関西学院文学部英文科で学んだ後に詩人となる竹中育三郎(郁、1904-1982)がいました。

中学卒業後、京都高等工芸学校(現・京都工芸繊維大学）図案科を経て、建築の仕事をしながら洋画家の前田寛治（1896-1930）に師事し画家を目指します。戦前は労働者や風景を描いていましたが、戦後は画家としてどのような絵を描くべきかを模索し、自身のキリスト教信仰を背景の一つにして聖書をテーマに制作するようになりました。

本展でご紹介する作品はすべて聖書を題材にしたものです。ミッション系の学校として、関西学院は彼の作品を多数所蔵しています。田中と学院の関わりはそれだけではありません。田中は「チャペル週報」や「クリスマス音楽礼拝」のプログラムにカットを提供し、また千刈セミナーハウスの礼拝堂にあったステンドグラス《聖書と自然》をデザインしました（現在ステンドグラスは上ケ原キャンパスの中央講堂に移設されています）。そして大学博物館は、田中を結成メンバーの一人として発足したキリスト教美術協会の展覧会を、2016年（第40回）と2021年（第45回）に関西展として共催しています。

普段は会議室などに掛けられ、なかなか目にすることができない作品もあります。この機会にぜひご覧ください。

エマオへの道　1980 年か

『関西学院クリスマス音楽礼拝』プログラム
1976 年

【開催記念講演会】
「証しとしてのキリスト教美術」
講師：渡辺総一氏
(キリスト教美術家)
日時：2023年6月13日㊋
11:00～12:40
会場：西宮上ケ原キャンパス
大学図書館ホール
※申込不要、聴講無料

クレネ人シモンの行い　1953 年

鶏三度鳴くまで　1990 年

関西学院大学博物館通信 第 14 号
KGU MUSEUM NEWS No.14
2023.4.25
関西学院大学博物館
〒662-8501
西宮市上ケ原一番町 1-155
TEL 0798-54-6054　FAX 0798-54-6462
URL https://www.kwansei.ac.jp/museum